

あとがき

小寺 敦

『出土文獻と秦楚文化』は、今號で4號を數えることとなった。これまでは上海博楚簡研究會の乏しい予算の中から、經費を絞り出すようにして出版してきたが、今回は科研費の補助を受けることができた。お陰様で、予算上は比較的余裕をもって出版作業が進められた。時として基礎科學研究受難の時代ともいわれる現在においては、まことに望外の幸運といえよう。

この科研費を申請することになったのは、本誌の出版費用を捻出するためという側面もあった。研究會の後、皆で酒を酌み交わしながら、お金がないという寂しい話をしていたら、どなたかが「だったら駄目元で科研費を申請してみてもは」と仰ったのがきっかけだったと記憶している。そこで上海博楚簡研究會の常連メンバーを中心とし、それに常日頃關係をもつ研究者も加えて申請してみたら、幸運にも審査を通過したのである。

科研費の獲得に伴い、雑誌編者としての研究會の名稱も、「上海博楚簡研究會」から「出土資料と漢字文化研究會」に変更された。ちなみに本誌執筆者の谷中信一は研究代表者、名和敏光・私は研究分担者、曹峰・西山尚志は研究協力者であり、野原將揮は研究會の常連である。なお、執筆者が研究會關係者ばかりであるのは、結果的にそうなったというだけのことである。

3號までの掲載文は、上海博楚簡の譯注のみに限られていたが、科研プロジェクトとの絡みもあり、今號では譯注以外の原稿も掲載することになり、編集擔當の判断で[論文]・[研究報告]・[調査報告]・[譯注]・[文獻目録]の5項目を立てた。別種の雑誌になってしまったかのような感もあるが、創刊號のあとがきにあるように、本誌はもともと上海博楚簡の譯注を掲載することのみを目指したものではなかった。また雑誌名に「秦楚文化」とあるのは、決めた時点では簡牘類の豊富な秦簡と楚簡とが念頭にあったわけではあるが、当初から内容を秦楚關連に限定せず、出土資料についての論考は何でも掲載するという認識があったことは確かである。そういう意味からいえば、今號で創刊の原點に戻ったともいえる。だからといって、出土文獻譯注の重要性は、創刊號の序文にもあるように衰えることはなく、本雑誌の重要な柱の1つであると考えている。編集作業を進める中に、[譯注]が後の方に位置することになったが、項目の順序は、他の學術雑誌の配列を参考にした結果という以上の意味はもたず、別に項目ごとの價値を反映しているわけではない。

前號までは、李承律・西山尚志・元勇準の3名が編集作業の實務を擔當してきた。この3名中、最後まで日本國內に残っており、なおかつそれまでの編集作業の實質的な責任者であった李承律が、2008年に東京大學から祖國韓國の成均館大學に轉出するという事態を迎えた。そのこと自體は非常に喜ばしいことではあったが、本誌の出版作業

の観点からいえば大黒柱を失うことを意味した。そこで今号より事実上、彼の元の職場に近いというだけの理由から、私が初めて編集作業に携わることになった。とはいえ経験のない私の知識は限られており、出版に至るまで、これら前任者のノウハウにおすがりすることとなってしまった。

3号までは執筆者が文書データを編集者に提出し、編集者が一括して版下に打ち出す方式に則っていた。だが今回は諸般の事情から、各執筆者が版下を持ち寄る形にした。この方式では、各自のパソコンのフォントスタイルやプリンタ機種の違いなどのために、版下の様式を完璧に統一することはまず不可能であり、なおかつ執筆者と編集者の間で頻繁に連絡しあう必要がある。しかし、外字・特殊文字・図表等が大量に使用される本分野では、版下作成上、最も手間のかからないやり方である。

掲載文のレイアウトには一應の基準を設けたが、細かいところまで調整することはできなかった。次からはもう少し余裕をもって、細かいところを詰めていくことができると考えている。編集作業に関する反省点はいろいろあるが、次号からはその反省を生かし、作業をより効率化していきたいと思う。

本号を発行するにあたっては、調査先研究機関のご協力が何よりも重要であった。2008年9月の上海・長沙調査に際し、復旦大學出土文獻與古文字研究中心の裘錫圭先生・劉釗先生を始めとする先生方、同大學文物與博物館學系の胡志祥先生を始めとする先生方、上海博物館の濮茅左先生・陳佩芬先生、湖南大學嶽麓書院の陳松長先生・朱漢民先生・姜廣輝先生、長沙市簡牘博物館の宋少華先生、湖南省博物館の喻燕姣先生には特にお世話になった。また新高速印刷株式會社東京支店の高田康弘氏には、出版にあたりいろいろとご協力いただいた。ここに厚く御禮申し上げる。

なお、本雑誌に掲載されている文章の中、谷中信一・名和敏光・小寺敦によるものは、平成20年度科學研究費補助金（基盤研究（B））「新出土資料を通してみた古代東アジア世界の諸相—漢字文化圏の中の地域性—」（研究代表者：谷中信一）による研究成果である。そして本雑誌の出版は同科學研究費補助金によるものである。

（謝辭以外、文中敬稱略）